

## 教育課程編成委員会

2014年7月18日

19:15～20:15

### 作業療法学科 部会 記録

出席者： 三沢幸史氏、小檜山修平氏、上松 剛氏（進行）、加藤和貴氏（記録）

1. カリキュラムの説明 学科長
- ・学習支援演習ⅠⅡⅢ 授業の補足的な意味 学年を超えた学び
  - ・現場の醍醐味を学生に伝える時間
  - ・身障分野 実習前に当事者と関わる 現場の作業療法士の評価する場面を見る  
三沢先生の施設にも協力していただいた 大変有意義であった
  - ・最近のトピックス まだ習っていない内容（運動学・解剖学・・・）も含んだ科目もある。

また、講師会資料に基づいて、学科長によって次のように説明された。

- ・学科方針 ・求める学生像 ・2013年度目標と結果
- ・国試結果・教育の質を高める（学科反省会を実施）
- ・臨床実践力を高める  
(難しい面もあり：学力が低い場合：コミュニケーション能力が低い場合：その他それらの状況の中で極力支援していきたい)
- ・今年度に向けての分析と対策
  - ◇コミュニケーションがとれない
  - ◇当事者の人に慣れるという授業をやっても、実習に行けなくなってしまう学生がいた
  - ◇健康感があっても学力が低い学生
- ・作業に焦点を当てることについて  
作業学系の充実を考え直さないといけないのではないか

2. 質疑応答とディスカッション（今後の課題） 一同

以下の議論の逐語記録中に下線を引いた部分が今後の教育課程の改善に結びつきそうな課題である。具体的に教育プロセスに落とし込んだものを次回の会議で取り上げたい。

三沢委員：昨年よりいろいろ頑張っている感がある。最近はやい学生が増えているようだが、職業経験者と違う部分もあると思うが現状は。

上松学科長：若い学生に手をかけがちになってしまっている。

三沢委員：社会人経験者が実習の際に問題を露呈するということもあるので注意が必要実習前に実技検査等はやっているようだが。

上松学科長：話す場面は多くとっている。癖のある人も多い。

小檜山委員：学生からのコミュニケーションはあるのか。

上松学科長：あると思う。こちらの心構えが大きい。

小檜山委員：先生が話しやすいと学生も表出しやすくよいのでは。

上松学科長：一方で友達でなく、実習指導者のような存在でもある。

小檜山委員：相談しやすい上司のような存在だとよい。

三沢委員：距離感が難しい。ハイテンションでいたり妙な親密さになったり難しい。その上でバイザーもうまく指導しなければ。

上松学科長：この前小檜山委員にペーパーペイシエントの検討に来ていただいた。学生も話しやすそうだった。

三沢委員：実際に症例を通して、実習という課題をどううまく達成していくかの関係を考  
えていくのが良いのでは。臨床の先輩とよい関係を築いていけるとよい。学内の  
実技系は臨床の作業療法士がサブで入るとよい効果があるのでは。

上松学科長：昔は原理原則の部分がわかっていたので、実習でもそんなに動揺しなかったが、今は現場ごとに違う部分もあり難しい部分もある。

三沢委員：あいまいな部分で何を切り取って、何が対象者の利益になるのか現場ごとにどう考えているのかその違いを見るのも勉強になる。保護者会をやっているということだったが、やはり効果的なのか。

小檜山委員：学生を取り巻く中で親もそのチームに含まれると思うので良いイメージがある。

上松学科長：親だけでなく兄弟なども来ていて学生の人柄が分かった。

三沢委員：前は高卒の後は親が来るなんてと思うが、時代が変わってきたようだ。

加藤：現場で本音を言わず、SNSなどで吐き出す学生をどうするか。

小檜山委員：コミュニケーションの中で自信を持つのが重要では。成功できる体験を持ってほしい

三沢委員：学校では注意されたら不貞腐れたりできるが、実習だとそれすらできなかつたりするのでストレスになる。それが実習だが、耐えられない学生が増えているなら対策が必要になる。実習前に実技系をやるのはよい。回数は少ないとしても「これは自信を持ってやれるという」ものが大事。

小檜山委員：できる学生でも有能感を持ってないのは、裏側により知識を欲している学生の気持ちがあるのかもしれない。基礎作業学の見直しをと言っていたが、プロセスモデル的なものが臨床で役に立っている。OTIP三沢委員などのモデルで考えると臨床での道しるべが見えるのではないかと思う。

三沢委員：作業と言われているものの枠組みを変えろということ。作業にもうちよつと重点を置いていくという。臨床ではひとつの方法ではない。

小檜山委員：学生は臨床経験もないので道しるべがあるとよい。

三沢委員：同じケースで複数の推論で考えてみると効果的。学生にはどのタイミングでやればよいのか。作業行動理論系から派生しているもの・・・ある枠組みがあるとわかりやすいが、そんなに必要ではないのではないかと思っている。作業療法の枠で考えれば、シンプルにとらえられるのでは。

上松学科長：臨床とよりつながることが大切であると改めて思う

以上